

「リンゴの定期便」～恩返しにリンゴを送り続けて 50 年～

谷平 稔さん（昭和 12 年生まれ）

私が久住第二国民学校（久住第二小学校＝平成 23 年廃校）に入学したのは、戦争が終わる 1 年前の昭和 19 年（1944）でした。

久住村（現成田市大室）にある学校は、久住の山奥で、爆撃とか空襲の実態もあまりありませんでしたが、緊迫の度合いは厳しかったようで、空襲があった場合に備えて、避難訓練は毎日やっていました。

先生の号令によって、全員が両手で耳と目を抑えて地面に伏すのです。私は、号令があっても上手くできなくて、履いていた下駄に顔をくっつけて伏せていたことを思い出します。

校庭はヒマシ油の採れるヒマ（とうごま）の栽培で、半分以上が畑になっていました。近くの田んぼではイナゴを捕ったり、山ではドングリを拾ったりしました。ドングリがいっぱいたまると、学校へ持って行き、先生が立っていた教壇をひっくり返して、その中に集めました。教壇はひっくり返すと大きな箱になるのです。大人たちは、そのドングリをカマス（穀物などを入れる袋）に入れてどこかに運んで行きました。食糧の足しになるのでしょう。

雨が降ると、下駄が無いとか、傘が無いとかいう理由で、学校を休む友達もいました。それは、仕方がなく許されることでした。

そのような頃、あの忌まわしい戦争が一層激しくなり、昭和 20 年春、20 数名の国土防衛隊（正規軍を補助し編成地区ごとの防衛に当たる）の兵隊さん達が、学校の校舎に駐屯することになりました。

兵隊さんたちは、任務の傍ら、予定の仕事が早く終われば、農家の畑仕事や防空壕掘りなどを手伝ってくれるようになりました。男手がいなくなった大室地区の人達は兵隊さんが来てくれたおかげで、大変助かりました。歓迎の慰安会を開いたり、風呂や食事を提供したりして、交流を深めていきました。

その中に、長野県小布施出身の丸山正志さんがいました。戦争が終わった翌年の昭和 21 年 8 月、丸山さんは大きなリュックを背負い、大室を訪れました。リュックの中には、真っ赤なリンゴがいっぱい詰まっていました。

「私の農園で作ったリンゴです。あの時お世話になった皆さんへのささやかなお礼です。」

大室地区の人達は、恐縮しながらも、「それならば」ということで、学校に提供することにしました。このようにして、世話になった人達の子どもや孫が通っている小学校への『リンゴの定期便』は、翌 22 年から始まり、毎年となり、新聞などにも取り上げられました。

（昭和 20 年春、国土防衛隊として滞在した）わずか 1 ヶ月の間に大室地区の人々から受けた親切や優しさ、その後の子ども達からのお礼の手紙や P T A や先生たちの小布施訪問は、丸山さんを感激させるものでした。

私も自分の子どもも、丸山さんのリンゴをいただき、お礼の手紙を書きました。そのたびに、家族や学校の先生たちから、丸山さんのお話を聞きました。

丸山さんは、自分の家族にも大室での出来事を話し、家族の理解と協力を得て、83 歳で亡くなる平成 7 年までの 49 年間、『リンゴの定期便』による交流は続きました。それは、あの忌まわしい戦争中でありながら、人情の温かさを教えられた、私の大切な戦争体験の記憶です。

児童数の減少により、久住第二小学校が閉校になった平成 23 年、丸山さんが亡くなって途切れていた、『リンゴの定期便』が、丸山さんのご子息から届きました。丸山さんが送り続けてから 50 回目です。

真っ赤なリンゴは、1 個ずつ子どもたちにプレゼントされ、校長先生は、「絆」という言葉を添えて、人情の尊さを、子ども達に伝えました。

丸山さんの人情を、私は今 87 歳になっても、リンゴの味と共に忘れません。このような人と人との「絆」が今の世もこれからも大事にされ、戦争のない平和が永遠に続きますように。

(原文のまま掲載しています)